琉球大学学術リポジトリ

「臺灣製鹽株式會社事業案内」

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2018-04-16
	キーワード (Ja): 矢内原忠雄, 台湾, 製塩株式会社
	キーワード (En): Yanaihara Tadao
	作成者: -
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/38297

矢内原忠雄文庫

史　料　名	大正十三年「臺灣製鹽株式會社事業案内」
封筒番号	333
原文所所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成 17 年 11 月 16 日
撮　影　者	富士写真フイルム　株式会社
備　　考	

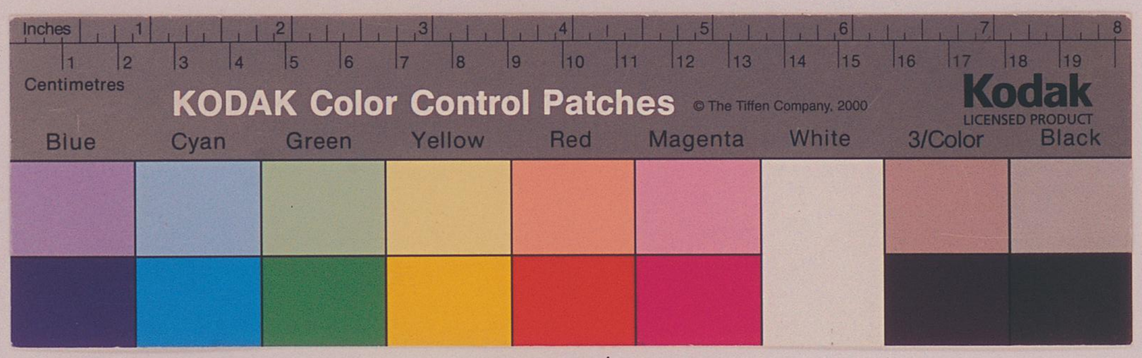
矢内原忠雄文庫

封筒番号： 333

史料名	大正十三年「臺灣製鹽株式會社事業案内」
資料形態	冊子
枚　数	12
頁　数	24
縦（cm）	14.7
横（cm）	9
厚さ(cm)	
書誌的事項	台湾 今泉分類記号： P

琉球大学附属図書館

臺灣製鹽株式會社事業案內



1／10

塩務史

臺灣製鹽株式會社

事業案内（大正十年）

會社創立　大正八年七月十六日

資本金　金貳百五拾萬圓

株式　五萬株　一株五拾圓

拂込濟資本金　金壹百萬圓

營業目的

一　鹽田ノ開設及鹽ノ製造

二　養魚池ノ開墾及經營

三　前二項ニ附隨スル事業

現在經營鹽田面積

一　天日鹽田　五百四十九甲七分參厘壹毫

九絲

二　採鹹鹽田　百八十壹甲五分五厘五毫四

絲

内譯

所在地	種別	甲數	副數
臺南州東石郡布袋庄新塭	天日鹽田	二三七・四一九五	一七九
同　北門郡北門	同	八八・三四七六	八〇
同　井仔腳	同	六二・〇〇〇〇	六二
同　新豐郡安順	同	一六一・九六四八	九二
同	採鹹鹽田	一八一・五五五四	一〇五
計		七三一・二八七三	五一八

備考　壹甲ハ二、九三四坪ニシテ約壹町歩鹽田一副ハ約壹甲歩ヲ標準トシ壹戸前即チ普通一家庭ノ增當區域ナリ

天日鹽田

布袋庄新塩鹽田

新鹽田　百四十三甲六分貳厘九毫六絲百副

大正九年三月九日開設許可ヲ受ケ同十二年三月完成シ爾來製鹽シツヽアリ

舊鹽田　九十三甲七分八厘九毫九絲、七九副

大正三年三月二十六日開設許可ヲ受ケ築造中ノモノヲ同八年十月二十日前出願者郭錫五氏ヨリ

事業繼承ノ上幾多ノ改良ヲ加ヘ完成セリ

北門鹽田

蚵蓥鹽田　八十八甲三分四厘七毫六絲、八〇副

本鹽田ハ全島ニ於ケル模範鹽田ニシテ其成績最モ良好ナリ大正八年八月二十日前所有主林熊徵氏ヨリ讓受ケ引續キ優良ノ成績ヲ以テ製鹽シツヽアリ

井仔脚鹽田　六十二甲

從來民有個人鹽田ニシテ各副ノ面積極メテ不均一ナルニ依リ追テ之カ整理ヲ行ハントス本鹽田ハ大正九年四月之ヲ買收シ目下賍耕契約ニ依リ賍耕ニ附シ居レリ

安順鹽田

安順天日鹽田　百六十一甲九分六厘四毫八絲九二副

大正八年十一月二十七日開設許可ヲ受ケ大正十

二年三月豫定工事ノ全部ヲ完成シ爾來豫想以上優良ノ成績ヲ以テ製鹽シツヽアリ

本鹽田ガ大正十二年四月二十一日畏クモ攝政宮殿下ノ行啓ヲ忝フセルハ會社ノ最モ光榮トスル所ナリ

採鹵鹽田　百八十一甲五分五厘五毫四絲

一〇五副

安平煎熬鹽工場原料鹵水ヲ採取スル爲メノ鹽田

ニシテ一ケ年間ニ比重二十三度ノ鹹水四拾萬石ヲ製造スル豫定ナリ鹽田ノ築造ハ天日鹽田ニ比シ甎瓦ノ敷設ナキ迄ニテ其ノ外大差ナシ同鹽田ノ中央位地ニ喞筒室ヲ設ケ喞筒貳臺ヲ据付ケ瓦斯發動機ニ依リ安平工場ヘ送水シ居レリ尚鹽田及工場ニ貯水池ノ設備ヲ爲シ鹹水約六萬石ヲ貯藏シ以テ雨期ニ於ケル原料鹹水ノ不足ニ備フルコトトセリ

製鹽奬勵法

鹽田小作人ノ勤勉奬勵トシテ壹副毎ニ一ケ年間ノ製鹽責任金額ヲ定メ其ノ超過額ノ一割ヲ賞與スルコトヽシ尚其超過額ノ最モ多キモノ數名ヲ選ヒ改良賞牌ヲ授與セリ而シテ右責任金額超過ノ有無ニ不拘各鹽田中成績最モ優良ナル小作人ニ對シテハ更ニ優良賞牌ヲ授與シ以テ之ヲ表彰セリ又一方勤儉ヲ奬勵シ收得金壹圓ニ就キ壹

錢或ハ貳錢ヲ郵便貯金ニ附セシメ長時日ニ渉ル降雨其ノ他不時ノ用ニ備フルコトトセシガ相當効果ノ見ルベキモノアリ

製鹽奬勵法ハ頗ブル小作人ノ興味ヲ誘致シ成績ノ見ルベキモノアルヲ認ムルモ一定ノ年額ヲ以テ責任額トナス結果之ヲ超過スルト否トハ主トシテ天候次第ニテ必ラスシモ勤惰ト一致セサルモノアルカ故ニ尚ホ愼重ナル研究ヲ經テ之レカ

改定ヲ爲サン事ヲ期シ居レリ。

天日鹽田製鹽高

大正八年八月會社開業以來同十二年末迄ノ製鹽數量ハ左ノ如シ

鹽田別	大正八年	大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年	摘要
新塩新鹽田	—	—	—	五〇、〇九七	三六、一三四	單位ハ擔ニシテ正味八十斤ナリ
同 舊鹽田	八、二八	一四、六〇〇	五五、八八五	八六、二二六	八、〇四四	
北門舊田	三五、三六〇	七二、一六六	一三三、五六五	一五四、五一〇	二九一、一三一	
安順鹽田	—	—	六、二一九	七五、六二〇	二九五、二〇九	
計	四三、五七八	八六、七九六	一九五、五八九	三六六、四五三	一、〇三五、七二八	

天日鹽ノ質品歩合ハ天候季節ノ關係ニ因リ歳毎ニ上下スルヲ免レズ又專賣局ニ於テ品質向上ノ爲メ標準引上ゲノ方針ナルニモ拘ハラズ漸次向上ノ傾向アルハ頗ブル意ヲ强フスルニ足ル今最近ノ實蹟ニヨリ各鹽田ノ割合ヲ示セバ左ノ如シ

鹽田別	上等鹽	中等鹽	下等鹽
新堀新鹽田	五・五割	一・七割	二・八割
同 舊鹽田	五・五	一・四	三・二
北門鹽田	六・八	二・二	一・〇

安順鹽由平均	六・三	二・四	一・三
	六・一	二・〇	一・九

天日鹽賠償金

現行ノ天日鹽ニ對スル賠償金ハ大正九年四月十一日改定セラレタルモノニシテ各百斤ノ價格左ノ如シ

鹽田別	上等鹽	中等鹽	下等鹽	等外鹽	摘要
北門及新堀安順	四三錢	三八錢	三〇錢	一六錢	等外鹽ハ大正十二年十二月四日ヨリ制定セラル
	四六錢	四一錢	三三錢	一八錢	

會社鹽田ノ經營ハ全部小作制度トシ右賠償金ヲ折半所得トシ尙會社ハ右ノ外鹽田ト收納倉庫トノ距離ノ遠近ニ應シ採收食鹽ノ運搬賃ヲ支給シ居レリ目下會社對小作人ノ關係ハ極メテ良好ニシテ益々親睦ヲ增シツヽアリ

安平工場

煎熬鹽工場

大正十年一月ヨリ作業ヲ開始ス原料トシテハ安順採鹹鹽田ニ於テ濃縮セル鹹水ヲ用ユルモノニシテ鹽田ヨリ工場ヘノ送鹹設備トシテ距離約千五百間徑四吋ノ鉄管ヲ敷設シアリ

工場ニハ方九尺ノ平釜七拾枚ヲ以テ此ノ鹹水ヲ煎熬ス

職工ノ制度

大正十年四月迄ハ職工ヲ日給制度トシテ作業セ

シモ石炭濫費ノ傾向アルノミナラス能率ヲ損スルコト大タシキヲ認メ同年五月ヨリ全部請負制度ニ改メタリ即チ原料鹹水ハ無料ニテ請負人ノ使用ニ任カセ石炭ヲ賣渡シ製產食鹽ヲ買取ルコトニ定メ今日迄作業ヲ繼續シ居レルガ制度改正後石炭ノ節約能率ノ增進著シク全然面目ヲ一新スルニ至レリ目下七十釜ヲ十四組ニ分ケ五釜ヲ以テ一組トナシ相當技倆アル者ヲ組長トナシ請

負作業セシメツヽアリ

煎熬鹽作業狀況

所要鹹水比重二十三度一釜一回六石焚揚時間七時間乃至八時間一晝夜三回ニヲ食鹽千二百斤一組五釜ニテ六千斤ヲ製造シ得ヘク工場一晝夜ノ生產量ハ約八萬五千斤年額二千五百萬斤ニシテ製品品質ハ內地一等鹽ニ匹敵ス

試驗工場

食鹽ノ製造及作業ニ關スル各種ノ試驗ヲ行ヒ結果良好ト認メタル事項ニ對シテハ之ヲ本工場ニ應用シ作業方法ニ改善ヲ加ヘツヽアリ

臺北工場

臺北ニ再製鹽工場ヲ經營ス天日下等鹽ヲ原料トシ井水ニ溶解再製スルモノニシテ釜數四枚製品ハ本島内ノ需要鹽ニ充テラレ居レリ

煎熬鹽及再製鹽賠償金

煎熬鹽及再製鹽賠償價額ハ大正十一年四月一日改定セラレタルモノニシテ左ノ如シ

種別	賠償金	摘要
煎熬鹽	円 一・六三〇	百斤當
再製鹽	二・二七〇	同

以上記述セル如ク會社今後ノ製產年額ハ

天日鹽　八五〇、〇〇〇擔　二五五、〇〇〇圓

煎熬鹽　二五〇、〇〇〇擔　四〇七、五〇〇圓

再製鹽	一三、〇〇〇擔	二九、五一〇圓
鹹水	四〇〇、〇〇〇石	四四、〇〇〇圓
計		七三六、〇一〇圓

ノ豫定ニシテ工場職工百二十名鹽田小作人千二百名ニ上ルベク力メテ生產費ノ節約ト品質ノ向上トヲ圖リ必要ニ應シ漸次鹽田及工場ヲ擴張シ以テ帝國鹽業ニ貢獻スベキコトヲ期スル次第ナリトス